

第3回市史講座ミニレポート：令和元年6月15日（土）

昭和恐慌と畜産業の展開―「米と繭」から「有畜農業」へ―

板垣貴志先生（島根大学法文学部准教授）

今回の講座では、島根大学法文学部准教授で『松江市史』通史編「近現代」（2020年3月刊行予定）の執筆者でもある板垣貴志先生にお話しいただきました。最近では戦争体験の記録収集などで地元メディアに登場することの多い板垣先生ですが、研究の中心テーマは「牛（家畜）を通して日本の近現代社会を見る」だそうです。『松江市史』で担当された項目「昭和恐慌」を中心に、これまでの「牛」をめぐる研究成果や、現在進められている調査内容まで、広くご紹介いただきました。

板垣先生が「牛」に関心を持ったきっかけは、もともと祖父の家が飯石郡鍋山で博労（ばくろう：牛馬の売買をする人）をしていたことにあるそうです。その板垣家宛に各地から送られた書簡などを読み解き、中国山地における牛の生産と流通、これに関わる慣行と歴史的意義を研究されました。

現在、「牛」と聞いてまず思い浮かぶのは、「乳牛」や「牛肉」ですが、かつては「役牛（えきぎゅう）」が中心で、田畑を耕したり、重い物を運んだり、糞が肥料になったりと、日々の農作業や運搬に欠かせない重要な存在でした。中国山地は、都のある畿内（山城・大和・河



内・和泉・摂津の五か国）に隣接していたこともあって役牛馬の商品化が進み、伯耆の大山（だいせん：鳥取県）、備後の久井（くい：広島県）、石見の出羽（いずは：島根県）といった巨大な牛馬市が近代以前から発達していました。かつては牛を柵の中に入れるのではなく、人間の方が牛の入らぬよう柵で囲まれた中で生活する集落も多くあったそうです。

そうした中で、いい牛を多く生産するための交配・品種改良が早くから進められ、優良な血統の牛は蔓牛（つるうし）と呼ばれました。蔓牛の生産開始は安永年間（1772～1781 年）とされ、これはメンデルの法則が発表（1865 年）される 100 年近く前のこと。理論よりも、経験を通じた農民達の実践の方が先行していたとは驚きです。

放牧の重要性も認識されていました。牛は山野を歩き回ること蹄が硬くなり、体格も頑健になる、持久力がつく、粗食に耐えるようになる、群れの中でもまれて性格が穏やかになる…など多くの効果があるそうです。反対に、牛舎育ちは敏感で気性が荒く、体も弱い。「かわいい子には旅をさせよ」と言われるのとどこか似ていますね。

一方、牛は「蓄財」「金融」、そして「社会保障」の機能も担っていました。牛は「農宝」と呼ばれ、米 10 俵（600kg）と同じ価値があったそうです。周辺地域から山地奥部への「預け牛」が行われ、多頭飼育と優良牛生産が展開し、自分で牛を購入する余裕のない零細農民でも、そうした牛を借りての農作業が可能になりました。

こうした「家畜預託慣行」は、1880 年代の松方デフレ期に飛躍的に拡大し、1930 年代後半から急速に衰退していったそうです。板垣先生はこうした慣行を、農業共済がない時代に、地域社会で金融機能と保険機能をになう「インフォーマルな社会保障制度」だったと表現されました。

さて、昭和恐慌（1930 年～）前後の島根県下の主要農産物価格を見ると、「米」と「繭」の価格が 1/2、1/3 と暴落したのに比べ、「牛」の価格は安定しており、むしろ高くなっています。それまでは外貨獲得の手段として国を挙げて生糸の生産が奨励され、多くの農家が副業としていましたが、恐慌が直撃して現金収入の道を断たれた農村では、更生の手段として「有畜農業」が奨励され、各地で研究が進みま

した。八束郡熊野村のように、多くの乳牛を飼育し、「牛乳の村」として有名になった例もありました。島根県下の牛の飼育数は、1956年（昭和31）に最も多くなったそうです。

しかし、1960年代の高度経済成長期以降、農業の機械化、化学肥料の利用が進み、公的な社会保障制度も整備され、牛は手放されるようになりました。しかし、かつて牛と生活を共にした人は、今でも本当に楽しそうに牛の話をされるとのことでした。

本講座のまとめとして、研究史の問題を指摘されました。地主制研究における地帯構造論においては、これまで「東北型」「近畿型」、そして「養蚕型」という分類が提示されてきましたが、昭和恐慌以降の「畜産」を検討することも重要だと強調されました。また、日本近現代史研究における時代区分の問題を取り上げられました。近代と現代の境界をどこに引くか、終戦の前後を連続と捉えるか断絶と捉えるか、研究者の間では今も見解が分かれています。板垣先生は、昭和恐慌以降から農業機械化までに展開された、畜産の奨励期（有畜農業期）を検討することで、戦前・戦後の連続説と断絶説の長い論争に一石を投じることができるかもしれない、と今後の研究構想を語られました。

そして最後に、近現代史研究においては「普遍」（＝当たり前のこと）と「特殊」（＝珍品）の両方を見なくてはいけない、として、民俗学者・宮本常一の言葉とその中国山地研究を紹介して締めくくられました。